

義浄訳『金光明最勝王経』について
—第 24 章「除病品」付加部分を中心として—

日野 慧運

1 本稿の目的

義浄訳『金光明最勝王経』(義浄訳)¹は、「金光明」の名を冠する梵本 (Skt.)²および他漢訳(曇無讖訳³, 合部⁴), 藏訳 (Tib. I⁵, Tib. II⁶) に比して大幅な増広が施され, 形成史上の最後尾に位置付けられるとともに, 思想上もっとも発展した内容を持つものである。義浄訳と全的に対応する梵本は発見されていないが⁷, 義浄訳はチベット語に重訳され (Tib. III⁸), 中央アジア諸言語⁹にも翻訳されたから, 義浄訳の代表する伝承系統 (SKJÆRVØ [2004: lvii] のいわゆる *Recension E*) は金光明経の伝承のうちで重要な位置を占めると言えよう。

本稿では, 義浄訳第 24 章除病品に出る, 治病法を説く偈頌の末尾に付加された, 義浄訳固有の偈頌を取り上げる。管見の限りこの付加偈頌全体に対応する他典籍は知られていない。しかしここに説かれる医科八術の列挙が, バラモン教正統派所伝のアーユルヴェー

¹ 『金光明最勝王経』十卷三十一品, 義浄 703 年訳出, 大正新脩大藏経 (T) . no. 665, vol. 16.

² *Suvarṇabhāṣottamasūtra*, ネパール写本に基づく十九品の校訂刊本 NOBEL [1937] および最新の校訂研究である SKJÆRVØ [2004] に準ずる, なお *Suvarṇaprabhāsa Sūtra* (南條・泉 [1931] およびそのコピーである BAGCHI [1967]) は二十一品に分品するが, いまはこれを探らない, SKJÆRVØ [2004: xxxii–xxxviii] 参照

³ 『金光明経』四卷十九品, 曇無讖訳 (412–421 年), T. no. 663, vol. 16, なお『歴代三寶紀』(587 年, T. no. 2034, vol. 49, 84b.) 以降『開元釈教録』(730 年, T. 2154, vol. 55, 698a, 藏外) に至るまで経録は四卷十八品とし, 現行刊本の第十九品は後代の付加とされる。

⁴ 『合部金光明経』八卷二十四品, 寶貴合 (597 年), T. no. 664, vol. 16, 曇無讖訳に真諦訳 (失訳『金光明経』七卷二十二品, 552 年, 曇無讖訳に三身分別・業障滅・陀羅尼最淨地・依空滿願品を付加, 寿量品を増広したもの, 『歴代三寶紀』98c–99a 参照, なお一部が聖語藏神護景雲二年御願經中に保存される, 小野 [1934], RADICH [2014] 参照), 耶舍堀多訳 (失訳『金光明経更廣壽量大辨陀羅尼品』五卷二十品, 561–78 年, 『歴代三寶紀』100b–c 参照), 闍那堀多の部分新訳 (『金光明経囑累品銀主品』合一巻, 『歴代三寶紀』48, 104a 参照) を補って編輯したもの。

⁵ 訳者不明 '*Phags pa gser 'od dam pa mdo sde'i dbang po'i rgyal po zhes bya ba theg pa chen po'i mdo* 五卷二十一品, 北京版 (P) No. 176, デルゲ版 (D) No. 557, ナルタン版 (N) No. 762, = NOBEL [1944]. 訳者は東北目録, 大谷目録による。なお NOBEL [1937: xviii] [1958: xxvii] は『ブトン仏教史』の記述など (OBERMILLER [1931: 186]) から Tib. I の訳者を Mūlakośa と Jñānakumāra, 訳出年代を 705–55 年と推定しており, また『デンカルマ目録』に漢文藏訳と分類される (no. 255, 芳村 [1950: 24] ([1974: 140])) ことなどに依拠した異説もあり (羽多野 [1968: 22], 金岡 [1980: 143–151]), これらも十分に反証されてはいない。

⁶ Jinamitra, Śīlendra bodhi, Ye shes sde 訳 '*Phags pa gser 'od dam pa mdo sde'i dbang po'i rgyal po zhes bya ba theg pa chen po'i mdo* 十卷二十九品, 798–816 年, P No. 175, D No. 556, No. 490, = NOBEL [1944].

⁷ ただし梵文原典の存在が予想され, 義浄訳第 8 章「金勝陀羅尼品」とヘルンレ蒐集梵文断片 (Hernle MS., No. 143a, SB 9) との対応が証左を示す (HERNLE [1916: 85, 109–112], Yuyama [2004: 20]).

⁸ 法成 Chos grub 訳 '*Phag pa gser 'od dam pa mchog tu rnam par rgyal ba'i mdo sde'i rgyal po theg pa chen po'i mdo* 十卷三十一品, 817–836 年, P No. 174, D No. 555, N No. 489, = NOBEL [1958]. なお OETKE [1977] はさらに, 梵本に対応しつつ付加部分のみ義浄訳に対応する Tib. IV, 梵本からの訳出なるも後代改竄されたと考えられる Tib. V, を報告している。

⁹ SKJÆRVØ [2004: vol. I ix], 金岡 [1980: 152–202] 参照。

ダ文献の所説と合致することは広く知られており¹⁰、元々医学的記述のあった本偈頌に新しくアーユルヴェーダの知識を取り込んだものと考えられてきた¹¹。

しかしここに疑念がある。義浄は本経訳出に先んじて『南海寄帰内法伝』の中に医科八術を紹介し、自身がインド医学を修めたことを披瀝している。すると義浄がこの付加部分を、読者の便宜を慮って、自身の知識を元に創作した可能性は考えられないだろうか。本稿ではこの可能性を、義浄訳の特徴と、付加偈頌の内容の両側面から検討し、最終的にこれに梵文原典を想定すべきか、あるいは義浄（ら）による創作と見なすべきかを結論すべく、考察を進める。

2 義浄とその翻訳グループについて

義浄訳の翻訳の性質に関して NOBEL [1937: xxiv, xvi] は、他訳との仔細な比較を行った結果、義浄訳の中国語としての体裁と読みやすさを賞賛しつつ、代償として原典を逸脱した潤色を多く含むと評価した。Nobel の指摘はあくまで潤色についてのもので、義浄訳の全部または一部が中国撰述であるという指摘は、管見の限りなされていない¹²。

一方、義浄の翻訳に帰される他の漢訳仏典を見ると、義浄訳『佛説大孔雀呪王経』を扱った研究では、義浄の翻訳能力について否定的な見解が出されている¹³。他方、『根本有部律』に関する研究では、従来義浄による漢訳が不正確あるいは不完全なものに見なされていたが¹⁴、新出の梵文写本断片との対応などにより¹⁵、現存テキスト間の差異は原典テキストの多様性によるものであって、義浄訳が原典を忠実に伝えていることが明らかになっている（八尾 [2013b: xviii]）。

さて、金光明経の義浄訳第 15 章に出る弁才天女讚嘆偈¹⁶の還梵を行った LUDVIK [2004] [2006] は、義浄の翻訳グループを明記する経題記を見出して義浄訳の信頼性の根拠とした。すなわち、スタイン蒐集敦煌文書『金光明最勝王経』卷八残簡 (S. 523)¹⁷を示して、義浄の翻訳グループは留学僧たる義浄自身に加えて「寶思惟 Manicintana」「利末多 Śrīmata」という二人のインド人僧を含んでいるから、梵文読解および翻訳の能力は充分信頼しうるとしたのである¹⁸。

¹⁰ 岩本 [1972: 155] など。

¹¹ 壬生 [1987: 302] など。

¹² 『国訳一切経』所収の解題は漢訳金光明経について「佛教聖典成立に関する史的研究の上からは、偽疑経の一として認められてゐるやうであるが、…必ずしも後世異域の偽撰なりとも断じ得られない」と述べているが（中里 [1931: 1]）、筆者は未だその典拠を見出し得ない。

¹³ 「サンスクリット学力はやはりそれほど高いものではなかった」（小林 [1984]）、ただしその論拠として、陀羅尼の導入句「怛姪他 *tad yathā*」を「音をそのまま写しているにすぎ」ず「呪文の一部と見なしている」点などを挙げるが、これは義浄ひとりの「愚かしいまちがひ」ではなく広汎に見られる訳し方である。この結論はなお検討を要するであろう。

¹⁴ 従来の見解については SCHOPEN [1992: 224 note 10]。

¹⁵ Yao [2013a]。

¹⁶ 義浄訳 vol. 16, 437a6–b20, Tib. II 293.16–296.14, cf. NOBEL [1951a: 126–127], 渡邊 [1921: 733]。

¹⁷ *Descriptive Catalogue of the Chinese Manuscripts from Tunhuang in the British Museum* (L. Giles, 1957, London) 58, no. 2102.

¹⁸ LUDVIK [2004: 712–713] [2006: 13–14]、なお不思議なことに還梵作業はもっぱら義浄訳と *Harivaṃśa* との対比によって行われ、Tib. II の対応箇所がまったく用いられないため、Tib. II との対照は今後の課題となろう。

このスタイン本経題記については、壬生 [1962: 11-12] が、同じく義浄の訳経グループを記すペリオ蒐集敦煌文書『義浄訳経題記』(P. 2585)¹⁹とともに紹介している²⁰。

現行刊本にはこの経題記は採られていないが²¹、対応する記述は、『開元釈教録』(開元録)、および『金光明最勝王経玄樞』(玄樞)²²に見える。開元録は記述を少しく異にするものの²³、後段にはまた別の構成員による翻訳グループをも記しており²⁴、義浄の翻訳グループが訳場が変わる度、また同一訳場内でさえ変動するものであって、固定的な構成を持たなかったことを示していると言えよう。

いずれにせよ、金光明経訳出時の義浄の翻訳グループはある程度確定しうるので、Ludvik の見解を受け入れれば、義浄グループの梵文読解能力を疑う必要はない。従って義浄訳に翻訳段階の加筆、改竄があれば、これを誤読に帰するのではなく、原本に由来するか、あるいは潤色等を目的とした意図的なものと見なすのが妥当であろう。

3 義浄訳の原典

義浄は 671 年から 695 年まで南海路を経て渡印し、数多の経律論を携えて帰国した後は、713 年に没するまで翻經に従事した。経録・僧伝によれば義浄は自ら将来した経律論の梵本四百部五十万頌を翻訳したとある。自ら将来した原典より『最勝王経』を訳出したのは 703 年、長安の西明寺においてであるとされる。

『最勝王経』の梵文原典について、慧沼『金光明最勝王経疏』(慧沼疏)²⁵は義浄が「周遊西夏二十餘年²⁶。天蔵龍宮備皆探賾，尋諸梵本，考較無遺。振錫東帰，奉勅翻譯。」(178a) したとあり、また「大唐中興三蔵法師(義浄)，勘諸梵本，譯其脱略，具獲諸品及其品名」(182a) と記している。

¹⁹ 『巴黎圖書館敦煌寫本書目』(伯希和編，陸翔譯，臺北・國立北平圖書館館刊，1933) no. 585.

²⁰ なお壬生 [1962] では状態の悪い複写本が参照されたものか、S. 523 の翻刻にやや問題がある。上記スタイン本、ペリオ本は「国際敦煌プロジェクト International Dunhuang Project」ウェブサイト上にそれぞれ「British Library: Or. 8210 / S. 523」「La Bibliothèque nationale de France: Pelliot chinois 2585」として登録され、鮮明なカラー写真を確認できる(2014 年 12 月現在)。

²¹ スタイン本の経題記は第八卷末第 20 章王法正論品の後に付されているが、大正蔵をはじめ『高麗大蔵経』(東國大学校発行) K. 127, vol. 9, 1346, 高麗蔵初雕本(Tripitaka Koreana Knowledgebase, <http://kbsutra.pe.kr/>, 2014 年 12 月現在, 高麗蔵初雕本の資料情報は、宮崎 [2012: 7 note 17] を参照), 『中華大蔵経』no. 135, vol. 16, 315-16 (校勘記にも言及なし) 等の現行刊本には採られていない。

²² 願暁撰, T. no. 2196, vol. 56, 「婆羅門沙門寶思惟, 尸利末多」(492b) を挙げる。願暁は日本・平安期の三論宗学僧, 藤谷 [2005: 11] に詳しい。

²³ 「北印度沙門阿彌真那, 證梵文義。」等 (568b-c), なお真那は寶思惟の異名である(『宋高僧伝』(988) T. no. 2016, vol. 50, 720a)。

²⁴ 568c-569a, cf. 『佛說一切功德莊嚴王経』(T. no. 1374, vol. 21, 894c 夾註), 『根本說一切有部尼陀那目得迦』(T. no. 1452, vol. 24, 418b), 『根本說一切有部毘奈耶尼陀那目得迦攝頌』(T. no. 1456, vol. 24, 520a), 『成唯識寶生論』(T. no. 1591, vol. 31, 81a)。

²⁵ T. no. 1788, vol. 39 (714)。慧沼は本経訳出後の景雲二年大薦福寺における訳場に証義として参加した人物, 藤谷 [2005: 4] 参照。慧沼疏は散逸した義浄訳の梵文原典を参照していたことが知られる(235a-b, 金岡 [1980: 19]), なお NOBEL [1937: xvii] もこの懺悔品偈頌部の梵文韻律への対応を指摘している。

²⁶ 「西夏」は西夏国(1038-1227)ではもちろんありえないが、中国西部の意でもなく、広く西方諸国を指すと思われる, cf. 濟暹撰『弁顯密二教論懸鏡抄』(T. no. 2434, vol. 77, 430c)「名胡国為西夏。晨旦名為東夏。或名天竺而為大夏也」。

また玄樞は「閩八梵經，以勘舊經本，拾遺補闕，綴文正字，翻作周語。」(429b)と記している。玄樞はこれに続いて慧沼疏上掲部および欠本である勝莊撰『金光明最勝王經疏』²⁷を夾註に引用しており，ここには「八梵經」の字は見えないものの，相応の資料に基づいた記述であることが推察される。

さらにまた，義浄訳第15章「大辯才天女品第十五之一」末尾(437c12)には，「此品呪法有略有廣或開或合前後不同梵本既多但依一譯後勘者知之」との夾註が見える²⁸。先にも触れた弁才天讚嘆頌および陀羅尼等の増広部分の翻訳に関する註記であるが，義浄らが複数の梵本を参照しつつ，それらが「有略，有廣，或開，或合，前後不同」であったところ，「但だ一(梵本)に依って譯」した，との意であろう。

以上から，義浄訳はおそらく単一の梵文底本からでなく，複数の梵文原典を用いて訳出されたと考えられる。梵文原典はあるいは八本であり，うち一本が底本の優先的地位を占めたのかもしれないが，これは定かではない。梵文原典が複数存在したことから，義浄訳は梵本間の異読を対照・校勘し，複数原典を一訳本にいわば編輯しつつ訳出されたと推定されよう。この校勘，編輯という作業に付随して，円滑な訳文を作るために潤色がなされたと考えられるが，しかし今日その繋ぎ目を確認する術はない。いま義浄訳の潤色と加筆について，別の角度から観察しよう。

4 潤色と加筆

先に触れた通り，Nobel は義浄訳の付加部分を細々指摘し，それらが原典によるものか義浄による加筆かは概して見極め難いとコメントしている²⁹。いまこの指摘を具体的に確認しよう。

義浄訳では複数の章末において，他訳と対応しない結びの句が付されている³⁰。結びの

²⁷ 勝莊は上述の経題記に表れる，703年の本経翻譯に直接参加した学僧である。藤谷[2005: 4, 7]を参照。

²⁸ 夾註は大正蔵はじめいずれの刊本も採る，諸写本中では房山雲居寺石経のみこの夾註を欠く(『中華大蔵経』校勘記，vol. 17, 307)。房山石経については宮崎[2012: 7 note 19]。

²⁹ Nobel による指摘の概要は以下の通り：義浄訳第20章まではTib. II第20章までにある程度対応しているものの，Tib. II第21章以降はTib. Iと一致しており，ために義浄訳とは随所に相違が見られる，すなわち，第23章(授記品)の導入部の不一致，第24章(除病品)で義浄訳の37偈頌(Strophen，五言四句)に対してTib. IIが13偈頌(4 pāda)のみを示すこと，また第25章(長者子流水品)における十二因縁の説相，陀羅尼の数，三偈頌と末尾の陀羅尼，章末の過去因縁譚との結合部分での相違，第26章(捨身品)の不一致，義浄訳30章(大弁才天女讚嘆品)31章(付嘱品)の付加，である(xxiv)。さらに，義浄訳第6章，21章，23章，24章，26章の章連結のための短文，第9章，13章，18章，21章，22章の末尾に付された結びの句，第7章冒頭部における第4章の妙幢菩薩の夢への言及などは明らかに義浄による加筆であり，義浄が原典によらない加筆・潤色を施していることは疑いえない(xvi)。

³⁰ Nobel に指摘されないものも含めて付加部分のみ抜き出すと，以下の通りである。

[5章末] 時諸大衆。聞佛說已。咸蒙勝益。歡喜受持(417c14-15)

[9章末] 時諸大衆聞佛說此甚深空性。有無量衆生。悉能了達四大五蘊體性俱空。六根六境妄生繫縛。願捨輪迴。正修出離。深心慶喜。如說奉持(425a2-5)

[11章末] 大衆聞已。歡喜受持(427b12)

[13章末] 時具壽舍利子及諸大衆。聞是法已皆大歡喜。咸願受持(433b3-4)

[20章末] 爾時大地一切人王及諸大衆。聞佛說此古昔人王治國要法。得未曾有。皆大歡喜信受奉行(444a6-8)

[21章末] 爾時大衆聞是說已歡未曾有。皆願奉持金光明經流通不絕(444c25-26)

句は概して聴衆の歡喜、増益、教説受持等を述べており、定型をとらない。章によっては章内容のまとめ様のものが述べられ(9, 20, 25章)、あるいは經典流布の内容が加えられる(21, 22章)。注意すべきは、上記のうち第9章, 20章, 21章, 22章が他訳では偈頌で終わっている点である。上記以外にも第4章末で, Skt., Tib. I, 合部は偈頌で終わっているところ、義浄訳は Tib. II のみと対応する散文を付加している³¹。ただし、第7章末では同じく Tib. II のみと対応する付加があるが、この付加部分は偈頌である³²。それによって義浄訳では、この第7章と第1章序品を除くすべての章が、散文で終わっている。

また同様に、複数の章頭において他訳と対応しない、前章を承ける承前句とも呼ぶべきものが付される³³。承前句について注意しておきたいのは、このうち第12章, 21章, 26章が、それぞれ第6巻, 8巻, 9巻, 10巻の巻頭にあたるという点である。従って結びの句が付された第11章末, 20章末, 25章末は前巻末にあたる。義浄訳第6巻の区切りは Tib. II 第6巻と合致するが、Tib. II に承前句の付加はない。

以上から、義浄訳による章末、章頭への散文短句の付加は、偈頌で終わる章末と、巻末、巻頭に集中していることが、ひとまずは指摘できる。このうちとくに巻末、巻頭という区切りは、梵文原典に存在しないはずのものであり、その連結を意図した散文短句の付加(第11章末, 12章頭, 20章末, 21章頭, 25章末, 26章頭)は、翻訳段階での加筆である可能性が強く疑われる。偈頌で終わる章末への散文短句の付加(第9章末, 20章末, 21章末, 22章末)にも、やはり翻訳段階での、体裁の統一を目的とした加筆の可能性が考えられよう。

NOBEL [1937: xvii, xxiv] はまた、義浄訳第7章「蓮華比喻讚嘆品」の以下の一文を義浄による明らかな加筆として挙げる。

善女天。汝今應知。妙幢夜夢見妙金鼓出大音聲、讚佛功德并懺悔法。此之因縁、我為汝等廣説其事。應當諦聽善思念之。… (422b)

Skt., Tib. I, 曇無讖訳では“Deśanā (懺悔)”章からこの“Kamalākaro nāma sarvatathāgatastava (讚嘆)”章に直接続いて、前品に出る妙幢菩薩の過去因縁譚を説くところを、義浄訳では間に第5, 6章を挟んでいるため、連結を明示するための文句であり、同じく章を

[22章末] 爾時大吉祥天女及諸天等。聞佛所説。皆大歡喜。於此經王及受持者。一心擁護。令無憂惱常得安樂 (446c21-447a1)

[23章末] 時彼樹神。聞佛説已。歡喜信受 (447b19-20)

[25章末] 爾時大衆聞説是已悉皆悟解。由大慈悲救護一切。勤修苦行。方能證獲無上菩提。咸發深心。信受歡喜 (450c11-14)

³¹ 「爾時世尊聞此説已讚妙幢菩薩言。『善哉善哉。善男子。如汝所夢金鼓出聲。讚歎如來真實功德。并懺悔法。若有聞者。獲福甚多。廣利有情滅除罪障。汝今應知此之勝業。皆是過去讚歎發願宿習因縁。及由諸佛威力加護。此之因縁當為汝説』時諸大衆聞是法已。咸皆歡喜信受奉行」 (413b28-c5)

³² 「大衆聞是説/皆發菩提心/願現在未來/常依此懺悔」 (423b21-22)

³³ [12章頭] (爾時世尊。) 聞四天王恭敬供養金光明經。及能擁護諸持經者。(讚言。)(427b20-21)

[21章頭] 爾時世尊。為諸大衆。説王法正論已。(444a16)

[23章頭] (爾時如來。) 於大衆中。廣説法已。(447a3)

[24章頭] 是十千天子(本願因縁, …) (447b23)

[26章頭] 爾時世尊已為大衆。説此十千天子往昔因縁。復告菩提樹神及諸大衆。「我於過去行菩薩道。非但施水及食濟彼魚命。乃至亦捨所愛之身。如是因縁。可共觀察」 (450c22-25)

なお第6章冒頭に承前句と言いうるものは見出しえない。

間に加えている Tib. II には見えないものである。

このように、義浄訳では文脈上明らかな困難のある箇所を中心に、随所必要と目された箇所、比較的自由に加筆が行われたと考えられる。このような加筆は潤色の範疇に入れてよいと判断できる³⁴。

5 借入か創作か

先にも触れたが、義浄訳第 15 章「大弁才天女品」において付加された弁才天女讃嘆の偈頌は、*Harivaṃśā* 中に出る女神 Nidrā への讃歌 “*Āryā stava*” と並行関係にあることが報告されている (LUDVIK [2006])³⁵。同章は最も短部の曇無讖訳から、Skt. = Tib. I, 闍那崛多訳、義浄訳と漸次増広付加されており³⁶、これに応じて描写される弁才天女 *Sarasvatī* の性格も発展的に変化し、“*Āryā stava*” に謳われる女神の性格を準備してきたから³⁷、*Harivaṃśā* の讃歌がまったく文脈の異なる義浄訳に埋め込まれたことも、理解しうるのである³⁸。それゆえ、“*Āryā stava*” の先行漢訳が組み込まれたとか、義浄らが独自に梵本を編輯して組み込んだなどという疑念はここでは生じない。

他にも金光明経とその外部源泉として、如来寿量品後半増広部と『大雲経』³⁹、三身分別品と『三身入門論』⁴⁰、業障滅品と『菩薩藏経』『大乘三聚懺悔经』⁴¹、陀羅尼最浄地品と『大宝積経』『无尽慧菩薩品』等⁴²などがすでに指摘されている。これらはいずれも最古形よりやや発展した Skt. 以降に付加された部分または章である。そしてこれらの借入は、曇無讖訳、Tib. I, 耶舍崛多訳、真諦訳、闍那崛多訳、Tib. II, 義浄訳のいずれもが梵文原典より訳出されたと見なす立場から、金光明経梵文テキストの増広発展の過程を物語るものと見なされる。

それでは、本稿の対象である第 24 章「除病品」の付加偈頌は、これらと同様梵文原典の増広によるものと見なしうのだろうか、あるいは翻訳段階の作為による付加と見るべき

³⁴ ただしすべて翻訳段階の加筆と見なしうるかは疑問が残る。章末、章頭に関しては、第 4 卷末から第 5 卷頭にかけては特段の付加はない。また第 3 卷末 (4 卷卷頭の前)、第 6 卷末 (7 卷卷頭の前) には結びの句の付加があるものの、Tib. II の該当部分と対応している。これは原典で結びの句を付加増広する傾向があったことを示すから、敷衍すればこれらすべての章末、章頭への散文付加が原典に由来し、卷末、卷頭に当たるのは偶然である可能性も否定できない。さらにまた偈頌終わりへの散文付加についても、第 4 章末、7 章末への付加が Tib. II と対応する例、第 7 章末への付加が偈文である例から、同様にこれらが原典に由来した可能性を疑いうる。第 7 章から第 4 章に言及する一文とて、他訳に欠けることと挿入意図の明白なことが加筆推定の根拠であるが、散逸した原典に基づく可能性は捨てきれない。しかしこうした疑問は畢竟すべての原典が明らかにならない限り解決しえぬものであるから、ここでは一旦閑却し、よりありそうな可能性を探ることにした。

³⁵ これについては渡邊 [1921] を嚆矢として夙に指摘がなされ、部分的また全的な同定が試みられてきた、以降の研究については LUDVIK [2006: 6–9] を参照。

³⁶ SUZUKI [2004] Table 1. に諸本の対応が見やすい。

³⁷ 長野 [1988] に詳しい。

³⁸ *Harivaṃśā* “*Āryā stava*” の解説、また義浄訳への埋め込みの解釈は LUDVIK [2006: 3–4, 12–13]。

³⁹ 静谷 [1940: 95]、鈴木 [1996] [1998a] [1998b]。

⁴⁰ 浜野 [1985]。

⁴¹ 静谷 [1940]、Radich [2014: 211–214]。

⁴² 松本 [1927]、静谷 [1940: 83–84]、ウルジージャーガル [2011]、Radich [2014: 214–222]、Radich [2014: 222–225] はまた依空満願品と *Samdhinirmocanasūtra* の字句の対同も検討しているが、これらは真諦訳の真偽問題を議論するためのもので、貸借関係に関するものではない。

であろうか。以下その内容について検証する。

6 除病品付加偈頌の検討

いま問題とする付加偈頌を大正蔵から引くと、以下の通りである。

復應知八術 總攝諸醫方 於此若明閑 可療衆生病 謂針刺傷破 身疾并鬼神 惡毒及孩童
 延年增氣力
 先觀彼形色 語言及性行 然後問其夢 知風熱痰殊 乾瘦少頭髮 其心無定住 多語夢飛行
 斯人是風性
 少年生白髮 多汗及多瞋 聰明夢見火 斯人是熱性 心定身平整 慮審頭津膩 夢見水白物
 是痰性應知
 總集性俱有 或二或具三 隨有一偏增 應知是其性 既知本性已 准病而授藥 驗其無死相
 方名可救人
 諸根倒取境 尊醫人起慢 親友生瞋恚 是死相應知 左眼白色變 舌黑鼻梁欹 耳輪與舊殊
 下唇垂向下
 訶梨勒一種 具足有六味 能除一切病 無忌藥中王 又三果三辛 諸藥中易得 沙糖蜜蘇乳
 此能療衆病
 自餘諸藥物 隨病可增加 先起慈愍心 莫規於財利 我已爲汝說 療疾中要事 以此救衆生
 當獲無邊果 (448b8-c6)

(大意) (1) 医術を総摂する八術を熟知して衆生の病を治療すべきである。八術とは「針刺」「傷破」「身疾」「鬼神」「惡毒」「孩童」「延年」「増氣力」である。(2) 先ず患者の容姿、言語、性行を觀、そして患者の夢を問うて、風・熱・痰の區別を知る。乾き瘦せ。頭髮少なく、心定まらず、語多く、飛行する夢を見る患者は風性である。少年にして白髮を生じ、多汗、多瞋、聰明、火の夢を見る者は熱性である。心定まり、身平整、慮審らかで、頭が滑らかで湿り、夢に水と白い物を見る者は痰性と知るべきである。総集性ならばこれらの二または三を俱有するが、とくに顯著な一をもってその性質を知るべきである。その性質を知ったなら、病に応じて投薬する。(3) 死相がなければ治療可能である、死相とはすなわち、諸感官が錯覚を起こす、尊敬すべき人・医師に慢心を起こす、親・友人に瞋恚を生ずる、左眼が白色に変ずる、舌が黒い、鼻梁が傾く、外耳の異常、下唇の垂下、であると知るべきである。(4) 訶梨勒の一種は六味を具え、一切病を能く除き無害なので、藥中の王である、三果、三辛、砂糖・蜜・蘇・乳は諸藥の中でも得やすく様々な病を能く療す。病に応じて他の藥物も追加してよい。先に慈悲心を起こし、財利を規ることなかれ。以上、医術の要点を説いた。もって衆生を救済し無辺の果を得よ。⁴³

⁴³ Tib. III (NOBEL [1958] vol. II, 283-284), 慧沼疏 (T. vol. 39, 325c-326a), NOBEL [1958] vol. I, 320-322 を参考にした私訳である。(3) 「耳輪與舊殊」は「聴覚の異常」とすべきかもしれない(後述)。(4) 「訶梨勒の一種」を慧沼疏は「慶是『解深密経』所説、毘濕縛藥」とし、「三果…三辛…并沙糖等十、易得、補治」とするので、「訶梨勒の一種」と一般に三果 triphala (訶梨勒 harītakī, 奄摩勒 āmalaka, 毘醯勒 vi(bi)bhīṭaka, cf. 矢野 [1988: 338-293], Mahāvīyūṭṭi SSCXXXII) に含まれる訶梨勒とは區別した。ちなみに『解深密経』では「譬如、毘濕縛藥。一切散葉・仙藥方中、皆應安処」(T. no. 676, vol. 16, 696c29) と出ており、「毘濕縛 viśva」と還梵できる(『佛教漢梵大辭典』

まずこの付加偈頌全体は、前々節に見たような潤色加筆には当てはまらない。あまりに長文であり、また偈文であり、他所にまったく言及のない内容が説示される。

この付加偈頌の所説を大分すれば、(1) 八術、(2) 体質診断、(3) 死兆、(4) 薬、の説示で構成されている。まず(1) 八術について検討しよう。義浄は偈頌部の前後の散文中にもこの語を用いており、先行漢訳には対応語が欠けるが、梵本および藏訳には対応語が見える。

A

曇無讖訳 有一長者，名曰持水。善知醫方，救諸病苦，方便巧知四大増損。(351c3–4 = 合部 394c14–15)

Skt. jaṭimḍharo nāma śreṣṭhī babhūva / vaidyaś cikitsakaḥ paramadhātukauśalaḥ / aṣṭāṅgenāyurvaidyaśāstreṇa samanvāgato babhūva (NOBEL [1937] 175.1–2)

Tib. I tshong dpon ral pa 'dzin ces bya va sman pa / gso bar byed pa khams la mchog tu mkhas pa / tshe'i rig byed yan lag brgyad kyi rgyud dang ldan pa zhig byung bar gyur to //(= **Tib. II**, NOBEL [1944] 137.18–20)

義浄訳 有一長者，名曰持水。善解醫明，妙通八術，衆生病苦四大不調，咸能救療。(447c1–2)

B

曇無讖訳 我父長者，雖善醫方能救諸苦方便巧知四大増損，… (351c17 = 合部 394c23–24)⁴⁴

Skt. ayaṃ ca mama pitā jaṭimḍharaḥ śreṣṭhī vaidyaś cikitsakaḥ paramadhātukuśalo 'ṣṭāṅgāyurvedatantreṇa samanvāgato ... (NOBEL [1937] 176.3–4)

Tib. I bdag gi pha tshong dpon ral pa 'dzin sman pa gso bar byed pa khams la mchog tu mkhas pa / tshe'i rig byed yan lag brgyad kyi rgyud dang ldan pa ... (= **Tib. II**, NOBEL [1944] 138.13–15)

義浄訳 我父長者，雖善醫方妙通八術能療衆病四大増損，… (447c9–10)

C

曇無讖訳 爾時長者子流水，問其父醫四大増損，因是得了一切醫方。(352a24–25 = 合部 395b5–6)

Skt. atha khalu jalavāhanaḥ śreṣṭhiputras tenaivaṃrūpeṇa naimittikena dhātukauśalyena pariṣṭeṇa sarvāṣṭāṅgāyurvaidyam adhigato 'bhūt (NOBEL [1937] 180.12–13)

Tib. I de nas tshong dpon gyi bu chu 'bebs kyis khams la mkhas par bya ba 'di lta bu de tsam zhig yongs su dris pa des / tshe'i rig byed yan lag brgyad po thams cad khong du chud par gyur to (= **Tib. II**, NOBEL [1944] 141.8–11)

s.v.). viśva は医典では三辛 trikaṭu (乾薑 śuṅṭhī, 華芫 pippalī, 胡椒 marica) 中の乾薑(ショウガ)の異名とのことだが(矢野 [1988: 302 no. 889]) この場合は樹果である訶梨勒の一種だから別物だろう。Monier-Williams *Sanskrit-English Dictionary*によれば他に viśva は Myrrh に、viśvā は Piper longum (= 華芫), Asparagus Racemosus (= *śatāvartī*) に同じ。

⁴⁴ 曇無讖訳「四大」を「四大」に修正 (see 351c17 note 11), 合部「善解醫」を「善醫」に修正 (see 394c24 note 6).

義浄訳 爾時長者子流水，親問其父 八術 要，四大増損時節不同餌薬方法，既善了知。
(448c7-8)

梵本および蔵訳に対応がある以上，これら散文中の八術の語もまた義浄訳の潤色加筆には当たらず，義浄訳の前段階ですでに八術の詳述が借入される素地があったと見るべきだろう⁴⁵。

続いて『内法伝』に見える医科八術（八醫）の記述を確認すると，以下の通りである。

其醫明曰，先當察聲色，然後行 八醫。如不解斯妙，求順反成違。言八醫者，一論所有諸瘡，二論針刺首疾，三論身患，四論鬼瘴，五論惡揭陀藥，六論童子病，七論長年方，八論足身力。言瘡事兼内外。首疾但目在頭。齊咽已下名為身患。鬼瘴謂是邪魅。惡揭陀遍治諸毒。童子始從胎内至年十六。長年則延身久存。足力乃身體強健。斯之八術先為八部，近日有人略為一夾。……於此醫明已用功學。由非正業遂乃棄之。
(『南海寄帰内法伝』卷第三，二十七先體病原，T. no. 2125 vol. 54, 223b-c.)

義浄はこの知識の由来を，自身「此（処インド）で医（方）明について已に用巧学（習）したのであったのだが」「正業でないこと（を覚るに至る）に由って，遂に之れを（放）棄した」⁴⁶と説明する。なおここに言及される「近日有人，略為一夾」とは，ヴァーグバタ編『八科精髓集』（AH）⁴⁷もしくはナーガールジュナ編『ヨーガシャタカ』（YS）⁴⁸を指すと見られている。

そこでアーユルヴェーダ文献に所説の医科八術を見ると，AH⁴⁹は治療の八科 *aṣṭāṅga* として「身体 *kāya*」「小児 *bāla*」「悪鬼の障り *graha*」「頭部 *ūrdhvāṅga*」「外傷 *śalya*」「咬傷 *damṣṭrā*」「老衰 *jarā*」「強壯 *vṛṣa*」の治療を挙げ，註釈により後三は「毒物学 *viṣa-cikitsā*」「不老長生 *rasāyana*」「強精 *vājikaraṇa*」に同定される⁵⁰。また YS⁵¹では，コロフォンに「解熱 *jvaracikitsā*」「身体治療 *kāyacikitsā*」「眼病治療 *netracikitsā*」「特殊外科論 *śālākya tantra*」（針 *śālāka* 様の器具を使う頸～頭部の治療）「一般外科論 *śalya tantra*」「解毒論 *viṣa tantra*」「鬼神学 *bhūta vidyā*」「小児論 *bāla tantra*」「強精」「不老長生」の十科が読み取れる⁵²。

これらに先行する『チャラカサンヒター』（CS）⁵³では，「身体治療」「特殊外科学」「異物除去 *śalyāpaharṭṭka*」「毒物・体毒・誤った食べ合わせによる異常に関する治療法 *viṣa-*

⁴⁵ ただし医科八術 *aṣṭāṅgāyurveda* のみの用法は不自然ではなく，ふつうに医学の意味をもつ（ルノー・フィリオザ [1979: v. 2, 414]，用例は『涅槃経』（下田 [1993: 150, 157]）などに見える。

⁴⁶ 宮林・加藤 [2004: 279]。

⁴⁷ 矢野 [1988: xxii]。

⁴⁸ Filliozat [1979: xviii-xix, 205-206]，ナーガールジュナは『スシュルタサンヒター』の改編者としても知られる。

⁴⁹ *Aṣṭāṅgahṛdayam: "Vidyotinī" bhāṣāṭīkā vaktavya pariśiṣṭasahitam, Vāgbhaṭa-viracitam, Tikākāra-Atridev Gupta, saṃpādaka- Yadunandana Upādhyāya* (Kāśī Saṃskṛt Granthamālā 150), 1959, Chaukambha, Varanasi.

⁵⁰ AH *Sūtrasthāna* (Su). 1. 5.

⁵¹ *Yogaśataka: Texte Médical Attribué À Nāgārjuna*, Jean Filliozat ed., 1979, Institut Français d'indologie, Pondichéry.

⁵² Filliozat [1979: iii]。

⁵³ *Charakasamhitā by Agniveza: revised by Charaka and Dṛidhabala with the Āyurvedaḍḍipikā commentary of Chakrapānidatta* (Chaukhamba Ayurveda Granthamala 34), Jādvajī Trikamjī ed., 1941. Repr. 1992, Chaukhamba, Varanasi.

gara-vairodhika-praṣamana)「鬼神学」「小児科学 kaumaārabhṛtyaka」「不老長生」「強精」の八科を挙げ⁵⁴, また『スシュルタサンヒター』(SS)⁵⁵は「外科論 śalya-tantra」「特殊外科論 śālākya-tantra」「身体治療」「解毒論 agada-tantra」「鬼神学」「小児科学」「不老長生論」「強精論」を挙げる⁵⁶.

以上概観した限りでは、『内法伝』の八醫はアーユルヴェーダ文献所説の八科に大同一致するものと見てよく⁵⁷, 『内法伝』の八醫の知識を前提として訳出された除病品の八術は⁵⁸, ひとまず「針刺 *śālākya」「傷破 *śalya」「身疾 *kāyacikitsā」「鬼神 *bhūtaavidyā/ graha」「悪毒 *agada/ *viśacikitsā」「孩童 *kaumārabhṛtyaka/ *bāla」「延年 *rasāyana」「増気力 *vājīkaraṇa」と還梵することができよう。

これにより、除病品の八術がアーユルヴェーダ文献の医術八科に対応することは明らかになったが、義浄の医学知識を確認したことで、かえって除病品の八術が義浄の創作である可能性も示されたことになる。

続いて(2)体質診断の記述を検討する。まず、風 vāyu・熱 pitta・痰 kapha のという身体の構成要素 dhātu が均衡を崩すと病素 doṣa として病を生ずるという観念は、アーユルヴェーダ諸文献をはじめ広く見られる古代インド典籍に広く見られるものであり、当付加部分に先行する梵本・他訳共通の偈頌部分にも既に出ている⁵⁹。しかしながら、患者の容姿、言語、性行および夢による風・熱・痰の体質診断という内容は、正統アーユルヴェーダ文献中に合致する記述を見出せない。

一方、漢訳仏典中を見ると、われわれは天息災訳『文殊師利根本儀軌』「一切法行儀品」第十五⁶⁰に、これと関係の深い内容を見出す。同経には梵文原典 *Mañjuśrīmūlakalpa* (MMK)⁶¹も現存するので、いまこれらを校合して該当する一部を抜粋すると、以下のようである。

A

… 從 陰 所得夢者，如是。見摩尼水精，眞珠瓔珞之聚。或見大海・大河・大地處處水滿，仍復流派浮於自身。或見水難，水無邊際乘屋而渡。或見雪山，玉山，水精山。及

⁵⁴ CS Su. 30. 28, 矢野 [1988: 234].

⁵⁵ *Suśrutasaṃhitā*: “*Āyurvedatattvasandīpikā-Hindīvyākhyā-vaijñānikavimarśa-Tippanīśahitā* (Kāśī Saṃskṛt Granthamālā 156), Repr. 2006, Chaukambha, Varanasi.

⁵⁶ SS Su. 1. 3, 大地原 [1971: 2] ([1993: 2]).

⁵⁷ 岩本 [1972: 155] は「諸瘡 śalya」「針刺首疾 śālākya」「身患 kāyacikitsā」「鬼瘴 bhūtaavidyā」「悪掲陀薬 agada」「童子病 kaumārabhṛtyaka」「長年方 rasāyana」「足身力 vājīkaraṇa」と還梵、「足身力」は精力増強の婉曲表現と考える。

⁵⁸ 『内法伝』は室利仏逝国にて 687–691 年の間に執筆したとされる、なおアーユルヴェーダの八科と正確に対応する医科八術の記述は、漢語文献では『内法伝』ものが最も早いとされる、CHEN [2006: 206].

⁵⁹ 三病素説を含む偈頌中の病理論と正統アーユルヴェーダ文献との比較は日野 [2014] に略述。

⁶⁰ T. 1191, vol. 20, 878b–880c, 980–1000 年訳出。本経典は義浄訳より遅い訳出であるが、同経第 9 章に対応する義浄訳『曼殊室利菩薩呪藏中一字呪王経』(T. no. 1182, vol. 20, 703 年訳出、両者の対応については、松長 [1966: 321–322].) が知られているから、第 15 章の原典成立を義浄以前とすることも不可能ではない。なお同経第 9 章にもアーユルヴェーダ文献の影響が指摘されている(大塚 [2011]).

⁶¹ *Āryamañjuśrīmūlakalpa*, T. Gaṇapati Sāstrī ed., Trivandrum Sanskrit Series No. LXX (1920), No. LXXXVI (1922), No. LXXXIV (1925).

見大雨。又復見白繖蓋衆，白莊嚴，及眞珠網，眞珠蓋，及白象白馬等。此夢，是從陰所現。又復見白色人・白衣・白拂，及觀羅綿・絹布・白銀，及鹽等。… (T. vol. 20, 879a28–b6)

… śleşmike svapnamukhye tu īdṛśāṃ paśya ve sadā // maṇikūṭāṃ muktāhārāśca samantataḥ prabhūtāṃ / ambharāśiṃ tṛplutaṃ cātmānaṃ sa paśyati // samantāt saritā kīrṣaṃ mahodadhisamaplutaṃ / tatrastho mātmadehastho paśye caiva yatra vai // tatra taṃ deśamākīrṇa puṣkariṇyo samantataḥ / plavaṃ codpānaṃ ca pānāgāraṃ ca veśmanam // udakoghair uhyamānaṃ tu paśyaiccaiva samantataḥ / himālayaṃ tathādrim vā sphatikasthaṃ mahānadam // nagaṃ śailaṃ ca rājaṃ ca sphatikābhiḥ samaṃ citam / muktājālasaṅchannaṃ muktārāśiṃ ca paśyati // mahāvarṣaṃ jalaugham ca paśyate 'sau kahāvahaḥ / śvetam sitaṃ chatraṃ pāṇḍaraṃ vāpi bhūṣaṇam // kuñjaraṃ śuklarūpaṃ vā kaphine svapnam ucyate / sitaṃ cāmarapuraṣaṃ vā ambaram vāpi darśanam // sparśanam saindhavādīnāṃ lavaṇānāṃ ca sarvataḥ / karpāsam kṣaumaḥpaṭṭaṃ vāloharūpyaṃ tathāgurum //… (MMK 146. 9–25)

…於夜第二分時，若夢見火，及大火焰熾照於四方，及見閃電光照一切，此是陽之所變。又復見鉢納摩囉識寶。及見種種寶，皆如火色。又夢近火，及復身触以致熱惱。… (879b12–14)

… paīttikasya tu svapnāni dvitīyayāme hi dehinām / jvalantamagnirūpaṃ vā nānāratnasamudbhavām // agnidāhaṃ maholkaṃ vā jvalantaṃ sarvato diśaḥ / svapne paśyate jantuḥ pīttasammūrcchito hy asau // padmarāga tathā ratnaṃ anyam vā ratnasambhavam / svapne darśanaṃ vindyā paīttikasya tu dehinaḥ // (147. 15–20)

…又夢大地廣闊恒遍行履，又夢上樹及上有刺之樹。亦是，從風所得。… (879b22–23)

vātikā ye tu svapnā vai tṛṭīye yāme nu kathyate / prabhāsvarā samantādvai diśaḥ sarvā nu dṛśyate / ākāśagamaṇaṃ cāpi tīryaṃ cāpi nabhastale // samantā hy aṭate nityaṃ ākāśe ca nabhastalam / vātikaṃ svapnam ity uktam īdṛśaṃ tu vidhīyate // (148. 18–22)

B

又隨順陰，說衆生色相。若人顏色，鮮白・端嚴・光潤，不愚・不鈍・有智・有慧，執志不迴。復多勇猛，有道心，恒愛語，長壽命。最得陰人奉重。… (T. vol. 20, 879c6–8)

śleşmikāṇām kathitā sattvā varṇavantaḥ priyaṃvadā / dīrghāyūṣo 'tha durmeghā snigdhavarṇā viśārada // gaurāḥ prāṃśuvṛttāśca strīṣu saṅge sadā ratāḥ / dharmiṣṭho nityaśūrāś ca bahumānābhiratāḥ sadāḥ // (MMK 149. 21–24)

又隨順陽，說其行相。恒嘔之相色多黑瘦。好作惡事，多為邪行。然有勇猛精進，復有智力。多好朋友多學問。… (879c13–15)

paīttikasyā tu sattvasya kathayate caritaṃ sadā / dveṣākārakruddhaṃ tu kṛṣṇavarṇo 'tha durbalaḥ / krūrāḥ krūrakarmā tu sadā vaktro vidhīyate // śūraḥ sāhasiko nityaṃ balabuddhisamanvitaḥ / bahubhāṣye bahumitrā bahuśāstrasamādhiḡaḥ // (150. 9–13)

復隨順風，說衆生行相。順風之人，身肢澁惡，不太肥，瘦性，不聰明。志不決定，多有忘失。住不恒所。… (879c25–26)

vātikasya tu vakṣye 'haṃ caritaṃ satvaceṣṭitam / vivarṇo rūkṣavarṇas tu pramāṇo

nātidurbalaḥ // naṣṭabuddhiḥ sadā prājño hr̥tsthīro hy anvasthitaḥ / gātrakampaṃ
bhramīś cāpi chardi praśravanam̐ bahuḥ // (151. 13–16)

A が夢による診断, B が色相, 性行による診断である。天息災訳は「陰・陽・風」の語を用いて一見陰陽説の混入を疑わせるが, 梵本と対比すれば「śleṣman/kapha, pitta, vāta」の訳語であることが理解される。A においては, 夜間の初分・第二分・第三分に見る夢が順にカパ・ピッタ・ヴァータ性のものであるとして内容を示し⁶², また B では三病素を三毒, すなわち貪・瞋・痴に対応させ⁶³, それぞれを特質とする人の特徴を示す。

カパ性の夢では, 摩尼宝珠, 真珠といった水に関連付けられる宝石, 海, 川, 雪山, 雨, 水難, また白色の天蓋や装飾品, 象, 馬, 人, 衣, 払子, 布, 塩等を見るときとする。これを参照してはじめて, 除病品付加偈頌の「夢見水白物」という一見曖昧な一句が, 上記具象物群の要約であったことを知るのである。ピッタ性の夢では火を見るという記述も一致するところである。ヴァータ性の夢では, 漢訳では地上, せいぜい樹上を往来するに留まるが, 梵本では虚空を飛行するとして, 除病品との一致を見せている。

B の特異な点は, 三病素―三毒説によって, 三病素を個人の内部の変調でなく各人の特質と見なすことである。これはアーユルヴェーダ文献の一般的な観念とは相違し, 除病品付加偈頌の説と合致する。色相, 性行の診断において除病品と MMK は概ね対応し, また三病素―三毒説は除病品の「多瞋…是熱性」という記述に端的に表れていると見なしうる。ただし「少年生白髮」「頭津膩」といった臨床的な文言は MMK に見られず, 除病品付加偈頌は単なる MMK の要約ではないと見ねばならない。

さらに MMK の A に類似する内容を, われわれは Kane [1962: 780] が紹介するところの *Atharvaveda-pariśiṣṭa* (AVP) LXVIII⁶⁴ に見出すことができる。AVP では夢見る人の特質として三病素を挙げる (MMK では B の分類法) が, 各病素に特徴的な夢の内容は, MMK によく符合する。すなわち, ピッタ性の夢では火, 太陽, 金・赤色のもの等々, カパ性の夢では川, 雪山, 真珠といった水に纏わるもの, 月や牛乳といった白い物等々, ヴァータ性の夢では天空や雲, 鳥, 星等飛ぶもの (自身が虚空を飛ぶのではない), 動乱するもの, 落下するもの等々を見るとき⁶⁵, 大枠で対応しているが, 個々の具象物に相違

⁶² 「若於夜初分時所得之夢, 當知是陰所得。於第二分時所得之夢, 是陽所得。第三分時所得之夢, 是風所得。俱非吉祥。若是第四分時所得之夢, 此為真寔。」(T. vol. 20, 897a24–28) “prathame yāme tu ye svapnā tām viduḥ śleṣmasambhavām / dvitīye pittamutthānād garhitā lokasambhavā // tṛtīye vātikam̐ vindyāñcaturthe satyasambhavām /” (MMK 146. 6–8).

⁶³ 「貪為陰, 瞋為陽, 痴為風, 及雜亂極雜亂相」(T. vol. 20, 879c1) “rāgiṇām vindyācchleṣmajam̐ paittikam̐ dveṣam̐ udbhavam̐ mohajam̐ vātikam̐ cāpi vyatimīśram̐ vimiśritam̐” (MMK 149. 12–13.)

⁶⁴ *The Pariśiṣṭas of the Atharvaveda*, George Melville Bolling and Julius von Negelein eds., Vol. I, Text and Critical Apparatus, Leipzig, 1909–1910.

⁶⁵ ピッタ性者の夢: 黄金, 太陽, 赤い花・衣, 火, 乾いた土地, 燃える草木, 神々, カルニカーラ樹, 水を飲む, 水浴び, 闘争による苦しみ, 女による苦しみ (svapne caiva prapaśyanti diśaḥ kanakapingalāḥ / maṇḍalāni samūhāṃś ca dikṣu pītāruṇaprabhān /13/ śṛṅgārimadirān deśān chuṣkāṃ malajalāṃ mahīm / suṣkagulmadrumalatā dahyamānaṃ mahad vanam /14/ viśuṣkāṇi ca vastrāṇi rud-hirāṅgāṃś tathaiva ca / dahanādīṃś ca devāṃś ca raktam̐ indum̐ sugandhikān /15/ palāśāni ca puṣpāni karṇikāraṇāni ca / digdāhavidyudulkāś ca dīpyamānaṃ ca pāvakaṃ /16/ bhūyīṣṭham̐ bhūyīṣṭāś cāpi pibanti subahūdakam̐ / saritsaravanānteṣu kūpaprasravaṇeṣu ca /17/ uṣṇārtāḥ śītakāmāś tu nima-jjanti pibanti ca / kalahaṃ caiva kurvanti duḥkhāny anubhavanti ca /18/ strībhīś caiva vimānyante kṣayante klāmayanti ca / ity evaṃ paittikā jneyāḥ prakṛtiśvapnalakṣaṇe /19/); カパ性者の夢: 梲

があり、両者に貸借関係があるとまでは言えない。

これら三者の資料を比較するに、まず三資料の挙げる三病素由来の三種の夢の特徴は概ね類洞しており、AVP、MMKに見られる広説を除病品では略説したものと見なしうる。しかし詳細を見ると、AVP、除病品は一病素を個人の特質として叙述するのに対し、MMKは個人が一夜に三種の夢を見るという独特の説を出し、三病素複合性の夢を説示しない点で特異である。またAVP、MMKは貸借関係を見出しうるほど合致するわけではない。

従って除病品は、夢診断についてはAVPに近く、体質診断についてはMMKの三病素一三毒説による夢と色相、性行との結合を前提にしていると見なせよう。さらにMMKに欠ける臨床的記述は、他の源泉の存在も伺わせる。以上によって、これらの知識を包括するテキストがインドにおいて存在し、それを基に略説されたものが除病品の原典であると推定されるのである。

これ以降の記述には、再びアーユルヴェーダ文献に対応が見えるようになる。(3) 死兆について、アーユルヴェーダ文献には患者の容姿、性行の異常、夢、自然現象や外的現象等による、様々な死の予兆 (ariṣṭa もしくは riṣṭa) に関する記述が見える⁶⁶。除病品の記述、すなわち、諸感官の錯覚⁶⁷、眼、舌、耳、唇等外見上の異常⁶⁸ 尊敬すべき人・医師・親・友人を憎むという行動上の異常⁶⁹、に相当するものも大概ここに含まれる。

檀樹、蓮、睡蓮、川、雪山、真珠、獸角、野猪、犀、野牛、鹿、象、ハンサ鳥、ジャスミン、月、祭文を有する婆羅門、白い乗り物、牛乳、凝固乳、果実、蜜、甘く白い飲み物 (svapneṣu caiva paśyanti ramaṃ candanakānaṃ /29/ vikuḍmalapalāsāni paunḍarikavanaṇi ca / śubhās ca śīśiraprāyā nadyaḥ śubhajalāvahāḥ /30/ tuṣāreṇāvṛtās cāpi himaughapatalāni ca / muktāmaṇisuvāśṅgā mṛṇālahalakāni ca /31/ varāhakaḥḍgamahiṣā mṛgās ca rathakunjarāḥ / spaṣṭatāraṃ tu hamsās ca vyapoḍhanti nabhastalam /32/ kundagokṣīragaurābhir indoḥ kīrṇagabhastiṣu / protphullakumudākārā vyomni sudhāmbusaprabhaiḥ /33/ rājahamsapratikāśaṃ śaśāṅkaṃ cāmaladyutim / subhrāṇi ca vimānāni phalāni madhurāni ca /34/ kṛtapuṣpopahārāni mahānti bhavanaṇi ca / brāhmanān yajñavādāṃś ca dadhikṣīrāmṛtāni ca /35/ striyaś ca paramodāktāḥ suveśāḥ svabhyaalamkṛtāḥ / madhuśvetapitāni prāyaśāś cīram eva tu /36/ svapneṣu caivam paśyanti kaphaprakṛtayo narāḥ / prakṛtisvapnabhāveṣu) ; ヴァータ性者の夢：風、雲、嵐、惑星、蝕、天空、鳥、鹿など動き回るもの、雲、山、林などが、動揺する様、上から落ちる様 (svapneṣu caiva paśyanti vātābhṛvimalā diśaḥ /44/ mārutavegatungāni bhuvanāni vanāni ca / śyāmatārāgrahagaṇaṃ vidhvastārkendumaṇḍalam /45/ dhārācaradbhir viśvābhāiḥ saṃkulaṃ gagaṇaṃ ghanaiḥ / bhramantaḥ pakṣisaṃghās ca mṛgās codbhrāntayūthapāḥ /46/ anyās cāpi śambarās ca giri-gahvarakānaṇāḥ / bhramanti ghnanti dhāvanti ūrdhvebhyāḥ prapatanti ca /47/ svapneṣv etāni paśyanti vātaprakṛtayo narāḥ /) ; 三病素複合性者の夢：上記三の複合、神々、ヤクシャ、ガンダルヴァ等 (mīśrasvapnasvabhāveṣu saṃnipātātmakān viduḥ /48/ etās tisraḥ prakṛtayaḥ saṃsrṣṭās ca viśeṣataḥ / devagandharvayakṣās ca parvatāni ca sarvaśaḥ /49/) , AVP 68. 1. 13–19, 29cd–37c, 44cd–49, なお本資料の作成にあたっては永ノ尾信悟先生のカードを使用させていただいた。ここにお断りと深謝の意を申し上げたい。

⁶⁶ 吉次 [2008] がこれらをよくまとめている。さらに Einoo [2004] に死の予兆に関する広汎な記述を得られる。

⁶⁷ SS Su.30, AH Śārīrasthāna (Śa) 5.21–37.

⁶⁸ SS Su.31, CS Indriyasthāna (In) 8, AH Śa.5.6–20 : 「左眼白色變」に合致する記述は見出せなかったが「左眼が窪む」(SS. Su.31.20, AH Śa.5.19) に対応するものか：「耳輪與舊殊」(「外耳が旧と殊なる」, “Die Ohrmuschel gegen früher verschieden ist,” NOBEL [1958] vol. I, 321, *ma ba’i ’khor lo sngon las gyur* Tib. III 284.7) に合致する記述も見出せず、感覚器官一般の変形 (SS. Su.32.1–2) に属するものと解釈するが、「耳輪」が聴覚機能を意味する可能性もある。

⁶⁹ SS Su.32.4, CS In.11.24, AH Śa.5.53–60.

また(4)菓として、除病品は訶梨勒の一種、三果、三辛、砂糖、蜜、蘇(酥)⁷⁰、乳を挙げ、これらは正統アーユルヴェーダ文献では広く用いられるもので、到底源泉を比定しきれぬものではない。また仏典においても、広く見られる薬用食品であるが、たとえば律典における「果菓」⁷¹と「七日菓」⁷²とに組み合わせの類洞を指摘できる。

7 結論

以上、義浄訳除病品の付加偈頌をめぐって、義浄らによる加筆の特徴と、梵文原典想定の可能性という二方向から検討した。

まず義浄の翻訳に関する検討によって、義浄の翻訳グループの梵文翻訳能力が信頼しうること、義浄訳が先行漢訳のみならず複数梵文原典を参照し、あるいは校勘・編輯をなしつつ訳出されたこと、その上で訳文を円滑なものとするための潤色が施されたことを推定した。一方翻訳段階での他テキストを故意に挿入した痕跡は見出しえず、これらを勘案するに、義浄が自らの知識を恃んで除病品に付加偈頌を施すという事態は、想定し難いものとする。

また付加偈頌の内容については、医科八術がバラモン教正統派所伝のアーユルヴェーダ文献の所説と合致し、また死兆、薬品の記述についても対応が見られる。他方、夢による体質診断の記述についてはアーユルヴェーダ文献に対応が見えない一方で、梵文『文殊師利根本儀軌』および『アタルヴァヴェーダ・パリシシュタ』との類洞が見出され、これらの対照比較により、この二資料に近似しつつも別系統に属する梵文広本が存在し、「除病品」付加偈頌の所説はこれを抄略したものである、との結論に至った。

以上より、一部先行研究において義浄の訳業を不完全、あるいは梵文原典から逸脱した不正確なものとする指摘があるものの、『金光明経』「除病品」への付加偈頌については、義浄らによる翻訳段階での付加とは見なしえない。かえってアーユルヴェーダ文献や梵文『文殊師利根本儀軌』等との並行関係を持つ梵文原典の存在が想定しえ、義浄らはこれを忠実に訳出したものと考えられるのである。

(参考文献)

- BAGCHI, S. [1967] *Suvarṇaprabhāsa-sūtra*, Buddhist Sanskrit Texts No. 8, The Mithila Institute, Darbhanga.
- CHEN, M. [2006] “Transmission of Indian Ayurvedic Doctrine in Medieval China,” *ARIRIAB* 9, IRIAB, 201–230.

⁷⁰ T. vol. 16, 448 note 5.

⁷¹ 「果菓者、謂訶梨勒果、菴摩勒果、鞞醯得枳果、胡椒、華芫。若有餘類、准前應用。」(義浄『根本説一切有部毘奈耶藥事』T. no. 1448 vol. 24, 1b20) 「果菓は、ハリータキーと、アーマラカと、ヴィピータカと、マリチャと、ビッパリーと、あるいはまた果菓に属するもので、食用とならないものである」(Yao [2013b: 8]) 前三が三果、後二が三辛のうち之二である。訶梨勒の一種は不詳(註43参照)。

⁷² 七日菓は「酥(sappi)・生酥(navanīta)・油(tela)・蜜(madhu)・石蜜(phāṇita 砂糖)」(『パーリ律』『五分律』、ただし諸広律によって内容に変動がある、平川[1993: 430–456])、生酥を韻文の制限等により「乳」(生乳であれば kṣīra/khīra)と表現したとすればより合う。内容の個々については Yao [2013b: 6 note 1–6] に委細が述べられている。

- EINO, S. [2004] “The Signs of Death and Their Contexts,” *Three Mountains and Seven Rivers. Prof. Musashi Tachikawa’s Felicitation Volume*. Motilal Banarsidass Publishers Private Limited, Delhi, 871–886.
- HOERNLE, A. F. R.
 [1916] *Manuscript Remains of Buddhist Literature Found In Eastern Turkestan* Volume I, Clarendon Press, Oxford.
- KANE, P. V. [1962] *History of Dharma Śāstra*, Vol. V (Part II), Bhandarkar Oriental Research Institute, Poona.
- LUDVIK, C. [2004] “A *Harivaṃśa* Hymn in Yijing’s Chinese Translation of the *Sutra of Golden Light*,” *Journal of the American Oriental Society* 124-4, 707–734.
 [2006] *Recontextualizing The Praises of A Goddess: From the Harivaṃśa to Yijing’s Chinese Translation of the Sutra of Golden Light*, Italian School of East Asian Studies Occasional Papers 10, Scuola Italiana di Studi sull’ Asia Orientale, Kyoto.
- NOBEL, J. [1937] *Suvarṇabhāsottamasūtra, Das Goldglanz-sūtra, Ein Sanskrittext des Mahāyāna-buddhismus: Nach den Handschriften und mit Hilfe der tibetischen und chinesischen Übertragungen*, Otto Harrassowitz, Leipzig.
 [1944] *Suvarṇabhāsottamasūtra, Das Goldglanz-sūtra, Ein Sanskrittext des Mahāyāna-buddhismus: Die Tibetischen Übersetzungen mit einem Wörterbuch*, E. J. Brill, Leiden.
 [1951a] “Das Zauberbad der Göttin Sarasvatī,” *Beiträge für die Kunde des Indischen Alterthums, Alt- und Neu-Indische Studien* vol. 7, 123–139.
 [1951b] “Ein Alter Medizinischer Sanskrit-Text und Seine Deutung,” *Supplement to the Journal of the American Oriental Society* (issued with Volume 71, Number 3), American Oriental Society, 1–35.
 [1958] *Suvarṇabhāsottamasūtra, Das Goldglanz-sūtra, Ein Sanskrittext des Mahāyāna-buddhismus: I-tsing’s Chinese Version und ihre Tibetische Übersetzungen*, 2 vols., E. J. Brill, Leiden.
- OBERMILLER, E.
 [1932] *History of Buddhism (Chos-hbyung) by Bu-ston: II. Part, The History of Buddhism in India and Tibet*, Materialien zur Kunde des Buddhismus 19, Heidelberg, in Kommission bei O. Harrassowitz, Leipzig.
- OETKE, Claus
 [1977] *Die Aus Dem Chinesischen Übersetzten Tibetischen Versionen Des Suvarṇabhāsasūtra*, Franz Steiner Verlag GmbH, Wiesbaden.
- RADICH, M. [2014] “On the Sources, Style and Authorship of Chapters of the Synoptic *Suvarṇabhāsottama-sūtra* T664 Ascribed to Paramārtha (Part 1),”

- ARIRIAB 第 17 号, IRIAB, 207–244.
- SCHOPEN, G. [1992] “On Avoiding Ghost,” *Journal of Indian Philosophy* 20, 1–39, Repr. in *Bones, Stones and Buddhist Monks* (1997), 205–237.
- SKJÆRVØ, P. O.
- [2004] *This Most Excellent Shine of Gold, King of Kings of Sutras, The Khotanese Suvarṇabhāsottamasūtra*, vols. I - II, Central Asian Sources V - VI (Sources of Oriental Languages and Literatures 60-61), The Department of Near Eastern Languages and Civilizations, Harvard University.
- [2009] “Fragments of the *Suvarṇabhāsottamasūtra* in Or.15009 and Or.15010,” *The British Library Sanskrit Fragments Volume II.1*, IRIAB, 597–635.
- YAO, F. (八尾 史)
- [2013a] “A Brief Note on the Newly Found Sanskrit Fragments of the *Bhaiṣajyavastu* of the *Mūlasarvāstivāda-vinaya*,” 『印度學佛教學研究』第 61 卷第 3 号, 1130–1135(72–77).
- [2013b] 『根本説一切有部律葉事』, 連合出版, 東京.
- YUYAMA, A.
- [2004] “The *Golden Light* in Central Asia: To the Memory of Ronald Eric Emmerik,” *ARIRIAB* 7, IRIAB, 3–32.
- 岩本 裕 [1972] 「インド医学序説 (1)」(第三の医学 アーユル=ヴェーダ), 『日本臨牀』30 卷 5 号, 日本臨牀社, 152–155(1258–1261).
- ウルジーヤルガル
- [2011] 『『金光明経』の研究 — 「最浄地陀羅尼品」の構造について—』, 『印度學佛教學研究』第 59 卷第 2 号, 日本印度学仏教学会, 951–948(124–127).
- 大地原 誠玄
- [1971] 『スシュルタ本集』(再刊: 大地原誠玄著, 矢野道雄校訂著『スシュルタ本集』全 3 卷, 谷口書店, 1993 年).
- 大塚 恵俊 [2011] 「*Mañjuśrīmūlakalpa* 第 9 章の成立に関する一考察」『印度學佛教學研究』第 59 卷第 2 号, 日本印度学仏教学会, 989–986(86–89).
- 小野 玄妙 (二楞生)
- [1934] 「大蔵文庫古逸善本目録 (一)」, 『ピタカ』5, 大蔵出版株式会社, 15–20.
- 金岡 秀友 [1980] 『金光明経の研究』, 大東出版社, 東京.
- 小林 明美 [1984] 「*Amoghavajra* 訳「孔雀経」の義浄訳模倣」, 『大阪外国語大学学報』64, 201–215.
- 静谷 正雄 [1940] 「金光明経「業障減品」の成立に就て — 西藏勝友 (Jina-mitra) 等譯本の暗示 —」, 『龍谷學報』第 328 号, 龍谷學會編輯, 81–96.

- 下田 正弘 [1993] 『藏文和訳『大乘涅槃経』(I)』(インド学仏教学叢書4), 山喜房佛書林, 東京.
- 鈴木 隆泰 [1996] “The *Mahāmeghasūtra* as an Origin of an Interpolated Part of the Present *Suvarṇaprabhāsa*,” 『印度學佛教學研究』第45巻第1号, 日本印度学仏教学会, 495-493(28-30).
- [1998a] 「『金光明経 如来寿量品』と『大雲経』, 『東洋文化研究所紀要』第135册, 東京大学東洋文化研究所, 1-48.
- [1998b] 「大乘経典編纂過程に見られるコンテクストの移動 —〈如来の遺骨に関する対論〉を巡って—, 『東洋文化研究所紀要』第136册, 東京大学東洋文化研究所, 227-253.
- 中里 貞隆 [1931] 「金光明経解題」, 『国訳一切経 経集部 五』, 大東出版社, 207-215.
- 南條 文雄, 泉 芳璟 [1931] 『梵文金光明経最勝王経』, 東方仏教協会, 京都.
- 羽田野 伯猷 [1968] 「チベットの仏教受容の条件と変容の原理の一側面」, 『日本文化研究所研究報告』第4集, 1-153.
- 浜野 哲敬 [1985] 「『金光明経・三身分別品』について」, 『印度學佛教學研究』第33巻第2号, 日本印度学仏教学会, 296-299(711-714).
- 日野 慧運 [2014] “Medical passages in *Suvarṇabhāsottamasūtra* and *Āyurveda*,” 『印度學佛教學研究』第63巻第3号 (掲載予定).
- 平川 彰 [1993] 『二百五十戒の研究 II』(平川彰著作集第十五巻), 春秋社.
- 藤谷 厚生 [2005] 「金光明経の教学史的展開について」, 『四天王寺国際仏教大学紀要』第39号, 四天王寺国際仏教大学, 1-28.
- 松長 有慶 [1966] 「Mañjuśrīmūlakalpa の成立年代について」『金倉博士古希記念印度学仏教学論集』平楽寺書店, 再録: 『松長有慶著作集 第一巻 密教経典成立史論』, 法蔵館, 315-330.
- 松本 文三朗 [1927] 『佛典批評論』, 弘文堂.
- 宮林 昭彦・加藤 栄司 [2004] 『現代語訳 南海寄帰内法伝—七世紀インド仏教僧伽の日常生活—』, 法蔵館, 京都.
- 宮崎 展昌 [2012] 『阿闍世王経の研究—その編纂過程の解明を中心として—』(インド学仏教学叢書15), 山喜房佛書林, 東京.
- 矢野 道雄 [1988] 『インド医学概論』(科学の名著 第II期 1-11), 朝日出版社.
- 吉次 通泰 [2008] 「古代アーユルヴェーダの終末期医療」, 『インド哲学仏教学研究』15, 東京大学インド哲学仏教学研究室, 57-70.
- 芳村 修基 [1950] *The Denkar-Ma, An oldest Catalogue of the Tibetan Buddhist Canons*, 龍谷大学東方聖典研究会, 京都 (再録: 『インド大乘仏教思想研究—カマラシーラ思想』, 百華苑, 京都, 1974).

ルヌー, L., フィリオザ, J.

[1979] 『インド学大事典』(全三巻), 山本智教訳, 金花舎, 東京(原著:
L'Inde classique : manuel des études indiennes par Louis Renou et
Jean Filliozat, 1947, Payot, Paris).

渡邊 海旭 [1921] 「純密教としての金光明経」, 『秘鍵』第二巻第一号(再録:『壺月全
集』上巻, 壺月全集刊行会, 1933, 728-738).

〈Keywords〉 金光明経, 義浄, アーユルヴェーダ, 文殊師利根本儀軌,
アタルヴァヴェーダ・パリシシュタ

ひの えうん 東京大学特任研究員

A Study on the Enlarged Part in Yijing's Chinese Translation of *Suvarṇaprabhāsottamasūtra*

HINO, Eun

Among the several transmissions which are called by the name of *the Sūtra of Golden Light*, one that represented by *Jin guangming zuisheng wang jing* (金光明最勝王經) translated by Yijing (義淨) in 703 ce. is the most enlarged one including not a few later additions. In the 24th chapter called “Healing illness,” *chubing pin* (除病品), it has a body of the verses explaining the method of medical examination and treatment, which are held in all the transmissions except the last additional verses unique in Yijing's version. This paper is a research on these additional verses, aiming at concluding whether these have had the original text in Indian language, or these are the quotation from other texts or the creation made by Yijing himself.

As preceding studies have shown, Yijing held his translating group including two Indian monks, Manicintana and Śrīmata, or at least one of them, in charge of reading and verifying the meanings of the original text in Indian language. Thus we can remove the doubt on Yijing's ability of comprehension in Indian language, which some studies have pointed. Then we examine the small additions which J. Nobel, who edited the Sanskrit, Tibetan and also Yijing's version of this sūtra, pointed as unique in Yijing's. Also we check the features of the large additions regarded to be made in India, such as the verses of praise for Sarasvatī found in 15th chapter, *da biancai tiannu pin* (大弁才天女品). Thus we can admit that the small additions can be made by Yijing's group in order to enhance readability, not to adopt any new idea.

Then we examine the additional verses in the chapter of “Healing illness,” dividing into four themes, which are “the eight branches of Āyurveda (Indian classical medicine),” “the examination in one's type of *doṣa*,” “the sign of death” and “the medicine.” On “the eight branches” and “the sign of death,” we can find well corresponding descriptions in orthodox Āyurvedic documents, such as *Carakasamhitā*, *Suśrutasaṃhitā*, etc.. On “the examination in one's type of *doṣa*,” on the contrary, we can find the correspondences in the Buddhist *Mañjuśrīmūlakalpa* (=MMK), with more detailed description. Moreover on the accounts of the typical dreams for three *doṣas* in it, we can find another correspondence in *Atharvaveda-pariśiṣṭa* (=AVP). Thus we can infer that Yijing's additional verses of this part had the original text in Indian language, which held similar contents to MMK and AVP but thoroughly shortened. On “the medicine,” we can find many similar definitions both in the Buddhist and non-Buddhist documents. The best correspondence would be the description in the Buddhist *Vinaya* texts.

Through above investigation, we conclude that this additional verses in the chapter of “Healing illness” in Yijing's *Sūtra of Golden Light* would have had the original text defunct now and never be the creation by Yijing and his translating group.